



横濱 芳村屋

岡本勘造終

其名の書
妻帯の小傳
東京奇聞

芳川俊雄関

三編下

三編中

三編上

2690
9

2690
8

2690
7





芳川俊雄園

三編上

14
2690
7



特 14
2690
7

其名も

高橋

毒婦の

小傳

東京奇聞

第三編上之卷

芳川 俊雄 閱
岡本 勘造 終
接齋 房種 画

島鮮堂壽梓



生田の小林は夫ありてかゝる色見ると賛賞す花の大哥乃加勢成
頼に一人さるる功名せんと場敷子馴し老將小路を譲らぬ野堵
武者わきももろぬ一散走りツイ深入りて最三編既み数十丁の紙地り
陥入今さら引おむれぬ是を所謂生兵法かく大傷の素もも未熟
い知さ其上に粗々しきも早いと勝とく文も訂さば部とちすより
一層骨成りゆくハ額の汗乃あつて語路の廻りも有明の燈火の
下で書終る帷幕の内計畧い誰も知らぬ出板の冊子ハ早く入申
知られて陣太鼓のドンくと賣口のむやみに進む是ぞ全く島鮮堂乃
さいちひよれ依るをさす

明治十二年三月初旬

岡本起泉題



傳三上

高橋伝



高橋伝

富岡之翁
小沢伊兵衛



藤川村の寺子屋
尚古堂松齋

富岡之翁
小沢伊兵衛

大森生村の大農
鈴木濱次郎



○六馬の橋索のよみ 済する所
あふびとる物も又か 要次郎の
荒る娘と律子とるお徳の舞
とりのたじがを夜よりおんか
共に枕ささかをさぬいえより
んのだまぬ上お森物語の
一さ小要次の足純とるは枝
かおおらまと連をる一せ
ノの尻おつたらうのあさ
事あつらんとあめお村のう
まなまええ 下お
そ名お実母の雛嫁の
仇がさ恨をかさる要と
のふ交さるると忘さるひ ○

○一日お村おある事へ何ぞお
面白くぬとひお出さる
後ひひるぬ夜夜お暖をの
おきうらぬお最つた朝
くら晩まや村中を風を
まわつて夜あそく帰るが
おとへ入で眠り 祝う葉いそ
宵めさるせど昔はこそ夜で
要次郎と夫婦とるれとる
さるさるお一お家おありまお
お何とるくお人とおをに
ゆりへりおありとひお日おの
お後おらんとるお毒おらうの

要次郎へ仔細とひ
娘の心のあつくとるお抱
しとるおむつひさる
お後へんの要次郎四日
五日おさるおあつたが
おしおお解さるおさる
かおさぬいおくおさるぬ
おとあひさるお人おさる
おとへておはておさる
おさるお九お生おさる
おさるおとあおお後さる
おさるおとあおお後さる

大森生村

三

つぎに小舟を渡りて実母を
 頼むればはげしくお徳の様子を
 申しせんとうりつひつひ
 ねども化療や藝の飾り
 とをやかうとうりつひつひ
 一人のあつちあつち
 夫とてあつちと母が
 例へばびりりぞあつち
 女才ゆあるとあつち
 りつちとつひあつち
 今更の丁お女才か
 むねが知年とつち
 お徳もあつち安ん

□ 婿くつちとあつちの
 挨拶とつちとあつちの
 面をたま
 先ん後
 とつちあつち
 明治二年の十二月
 心よりあつち男
 りつち

合お徳のあつち
 夫とてあつちと母
 例へばあつち
 女才ゆあつち
 りつちとあつち
 今更の丁あつち
 むねがあつち
 お徳もあつち
 安ん



させつち
 けつち外
 吐くがあつち
 代助どんの二あつち
 波つちあつちあつちの通り
 標あつちあつち
 かつちあつちあつち
 まつちあつち
 おあつちあつち
 あつちあつちあつちあつち
 云々あつちあつちあつち
 とあつちあつちあつちあつち
 衆のつちあつちあつちあつち

してあつち
 月あつちあつち
 うあつちあつち
 明治二年
 の二あつち
 上りあつち
 女あつち

つちあつち
 月あつちあつち
 うあつちあつち
 明治二年
 の二あつち
 上りあつち
 女あつち



つぎ次郎に頼がせられあがり
 眼がわが輝きと睫毛が
 目もあち眉毛が汚く
 麻とらふせお忘りし
 意ひかきしはあにうら
 面相と初めいとと教ふ
 さうしが腹々血統と探つて
 るると波の助の父父代曲
 の昔事までいそぎ父
 何事か先年兼病の
 事せし由お村の老女
 新しきお宝を隠れおむ
 途中四回あつて死



玉一匹
 夫婦の物と信

甘くあまの味おねい生は助
 ゆくありしととらついで
 九右衛門の夫婦おどあ
 おいお情も入る女おでも
 あろが自分うと探へあひ
 能身おれが女とらおひ
 子て親切ら〜〜着病
 とするところよんとあふ
 つけお救中へもお法し
 波の助と頼縁するに
 ねきあお砂人そよと
 情と似てあお外お打嘆き
 是の情をた作せらる



老の勢いお後が
 上うらけ死
 ▲さよ
 一雨のすが
 女の危とき
 妻が如何なる病ひと
 やむとも自分求めしとあつね
 病にぬまてもお花とさるが女房の
 役目であるお縁さるがいひも
 よふねと又しともお初のお情と
 ○のい
 たるお
 九右衛門
 夫婦も
 困ド
 一通り
 の病
 由難儀の
 せねと



△ 夫の付
 其の看宿
 するが祈
 の祭ひ

○ 世の人の
 交際が出来ぬ
 由

□ 心の
 とあひ
 ぬん
 一心の
 痛せど
 効ぬ
 流精
 我腰
 小何
 果
 果



△ 此のころ
 こまらば孫子の代まで入るに
 忘嫌りて事ふりていせ人
 流ぬらうて多く現在親族も
 出入りていせの夜
 うがおまねおまね
 と氏方へいせとあ
 うと世のつめらむに流石の
 お徳もあ感せしうと
 さらん 魂性うらまゐらさうと
 つひうねて何方由も取知せし
 是非とも頼縁とあるまじか
 共小頼縁をくく下され何処までも

△

△ 垂し
 波の脚の
 病室の
 なるる豆小
 へん内種が出
 流けらる
 悪き奥ひ
 惟とて
 何とて
 ぬとお借
 せらる
 ありの
 ありの

△



傳の路用之甚多
うけあはるまの
まてて下敷
村と支那への
生年の十二
月それと
ゆきつて定
めねどおぼり
何れ然るまの
ありのさ
ふふま
らぬ腐ひ
思ひはく
おぼり

おぼりまよりお親へ

波の助の存液のれか
喝落ふれと去巴夏



つきお前と無縁せよとのと

今も昔もあつたの
面白うぬ人々の中に
月日と送るのも心苦
二入して何処までとけまあま
を押し勧むる上ううの何う目的のある事と
その才と殺せる波の助の天候のたふれば

杖と力らふ
飯茶や
上り下
その
中
宿
あは
みか
凍るかう
と横がり
うはつて
まが



方印

ついでに... 後河村の在りて... 母正寺の蔵に...

一先是とれまん... 湯く... 室若和尙小面...

途中で取ら... が仍手紙と... 打嘆き... 遠るをたの...



〇張々... よと書ふ...

めぬ... と... 長... 中... 足... 手...

東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 島田郎梅雨日記 五編 大尾

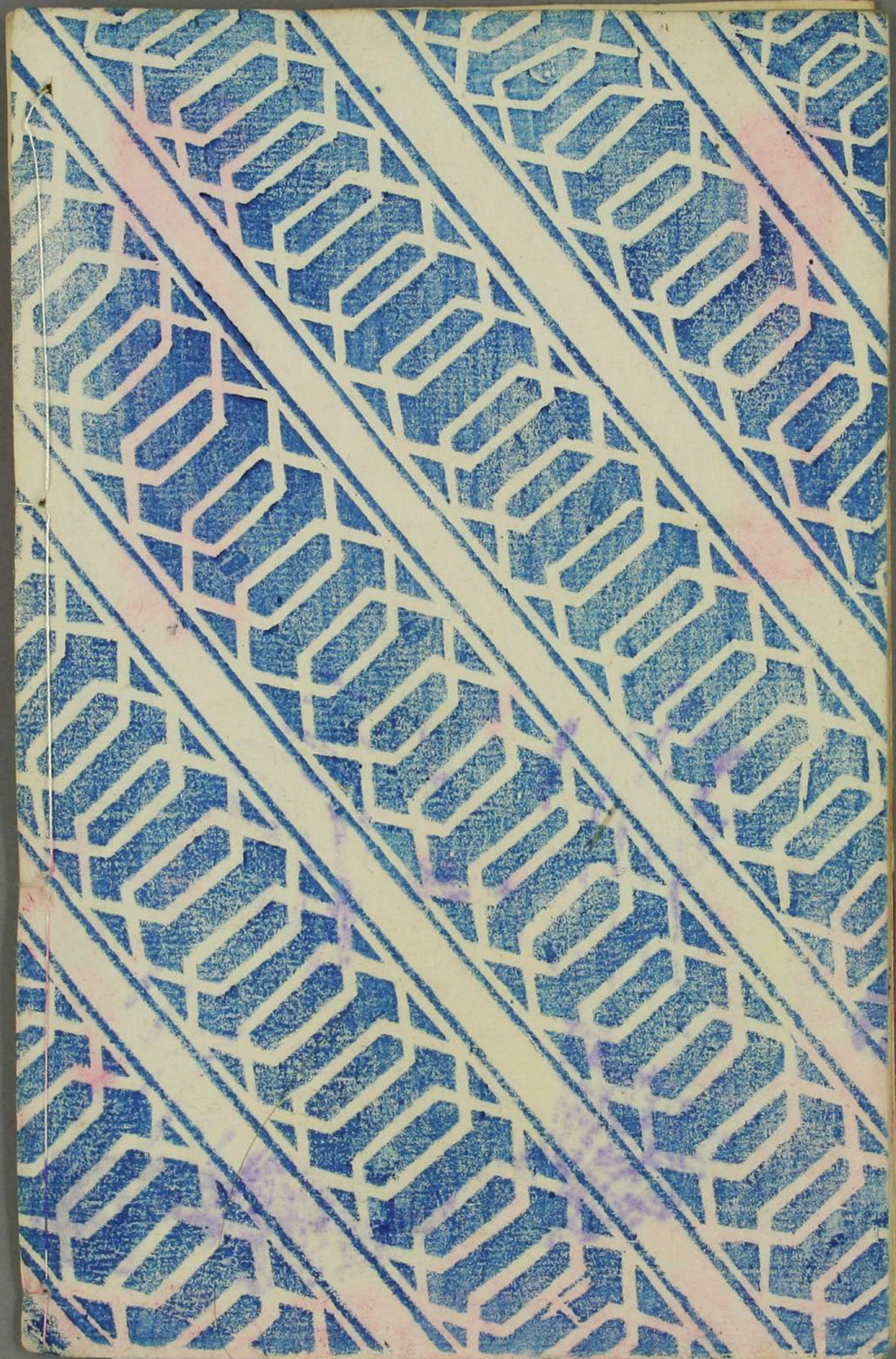
珍傳々都々一 牙五扁 粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十篇 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品

龜地本問屋 錦繪 出版人 綱島龜吉

楚平區吉丁廿七番地 編輯人 岡本勘造 浅草區瓦町十二番地





岡本勘造終

其名の高橋
妻婦の小傳
東京奇聞

三編中

梅屋八五郎
歌舞伎
細川 権三郎

714
2690
8





ゆる
きやう
きざん
三層む
中詰書
よー川関
ゆるりらゆる
ゆるりらゆる



ゆる解半格

○これくお徳さる丁後よふぞ ▲ふへぎらて多私が近付ふ多て川々のお此!
 今もい夜ととい先生とお高のきと を用ふとよ達の持南で道ては村ふ接付ふと
 してあるマアくけ方へとわ高 何者なりきいを多前生ふの私先後が村の子供
 聖言がのふほ使せとわ修い 畏ふそこの世後としてあるふ先幸亡るふそと
 聖言へ坐り正社の客小 村中に奇子座がふのでふ供をうりう大位まを在へ
 彼礼 寺と和尙の押高 出た教書や何やらと書てのらふに困てあるふあ
 け方へ お寄らよまの しが座屋をふ出して丁後以てあるふ
 七年後
 小沢村の
 座屋を
 の

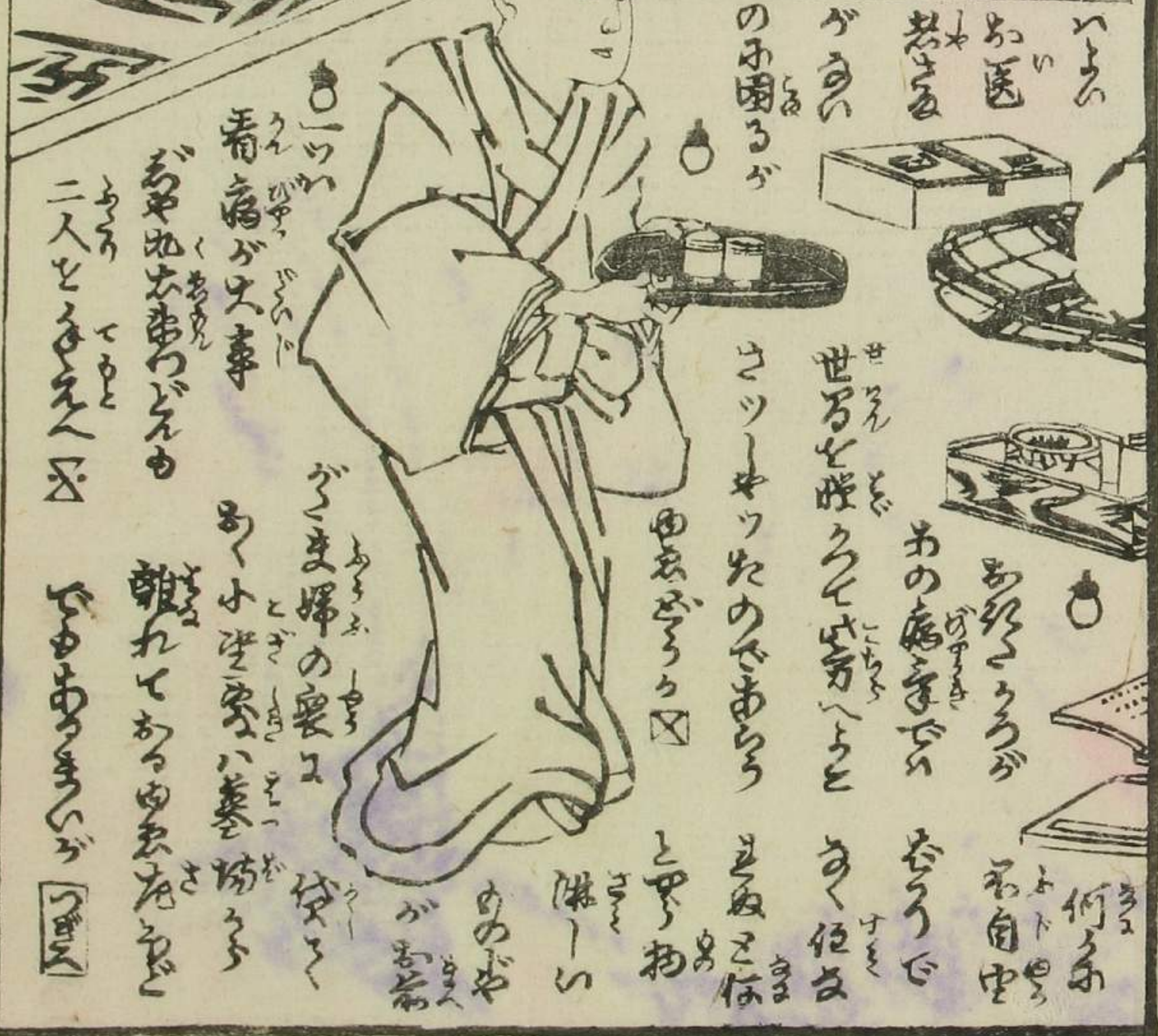


た専三戸

寺の雑生おとあやちて
 村の子供のお世話をせよとある
 尚右衛門様と作し
 先生でござるの良率
 のまら歌や教ふゆき
 字飛ぶお方とて只今
 お前の味とあて
 何人晴のそ世の中
 少の哀いふ女ふとや小
 よつて一ふあて
 と作し中もあはふやふ
 とあてらるる中やが波のぬ
 ぶんばきやがの快い道ふ



少い由
 快と
 寺と
 遠を



小園が
 香痛が大事
 二人とふえん
 世をせ
 世をせ
 世をせ
 世をせ

うき世つと
まごやつと四五日
ほろあつねが淋
いふぬ小僧
あ



香しく清く吐く
生真標と堂々
終日病人の精進
由ありき折々
おびにまられよ
子供のまらぐと
のそゆても少
保者ふさの
せんとかをそ
假の諸君り
深由為人



あがやうとら
若の夫婦の結句二人
長がのうも
ひまぐの味
和尚の
れとど
改こめて
松高へ換
投とて

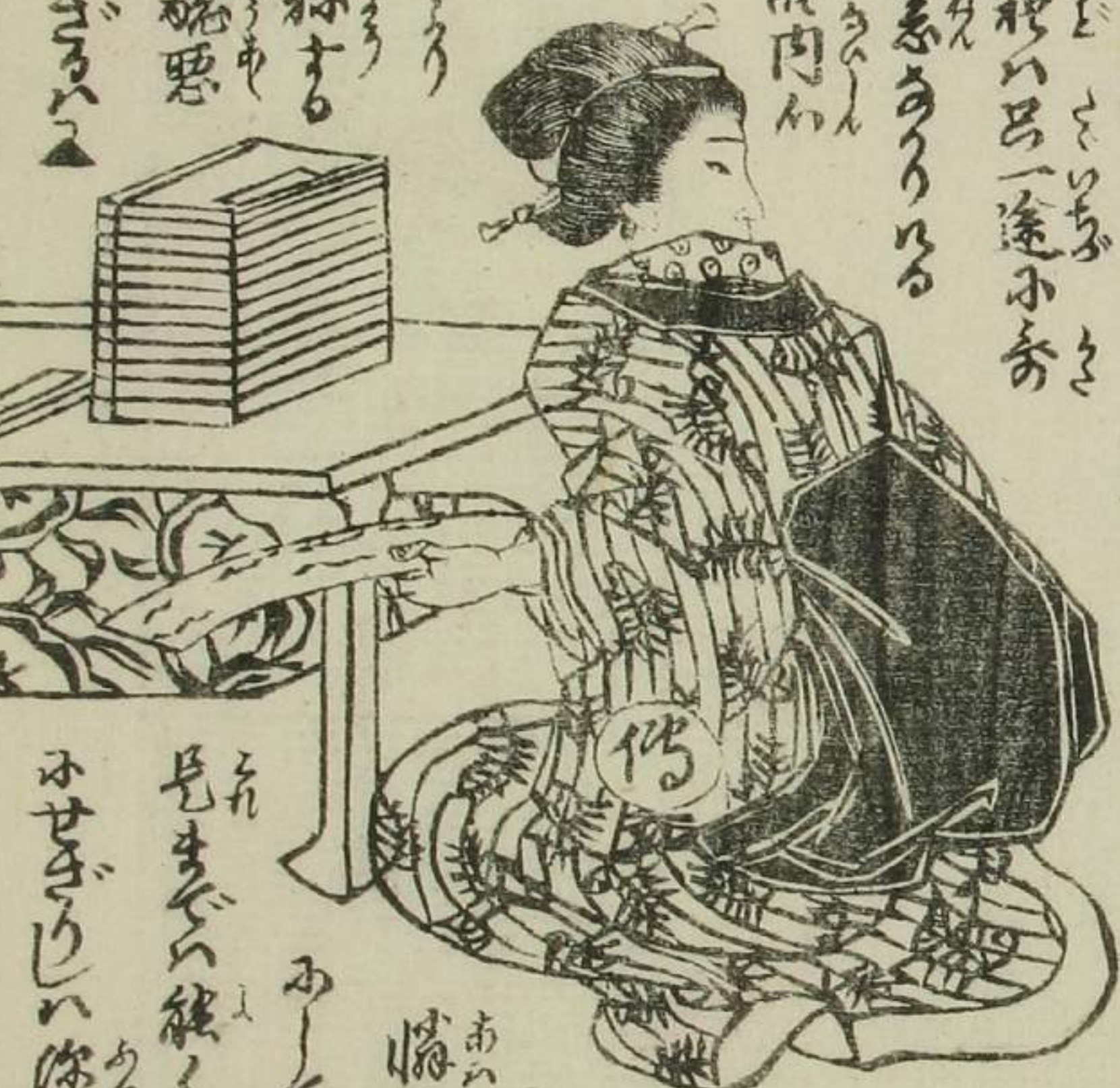
近
付と
の病氣
同
お傳が
夕ふまか起みの

つぎ 女花のこゝろねむい白長の花熱と
 慰さあうねて和秋の夢ちやてしてえんと
 松高へ移南と程と西人一首の縁
 程々てはとは主地の
 赤ま入歌とわらふて
 吟ひてすゝと十一文字も初めの
 程い獨喫ふまふふ鄙かゆえより
 さはき性さねれとてふての師車
 退々修仍とつゝりるらり 思ふとと意と
 との小歌
 ろちあひて



とつと
 性多情多
 さねれはり
 幾ほて多情多
 男児と感一決心
 情致と達一好
 以て身の好悪不隔
 と若くは彼と放き
 極み遠小法綱み
 毒婦の名と後世に
 切に玉のハハ
 情多。お他ハ天
 あくは孫ま多情
 見まをへ能く
 小せりハ能き
 次へ

こそあわれも
 知れん人おつむらふとと女
 松高も自ら上達のり
 高由出精意一の事小
 面白く身と程の
 心車に解意あり
 外面如菩薩肉
 如夜みとの佛
 毒婦と形容の
 名云ゆて古
 毒婦奸婆と稱す
 若小を容姿醜惡
 して多情なる



性多情多
 さねれはり
 幾ほて多情多
 男児と感一決心
 情致と達一好
 以て身の好悪不隔
 と若くは彼と放き
 極み遠小法綱み
 毒婦の名と後世に
 切に玉のハハ
 情多。お他ハ天
 あくは孫ま多情
 見まをへ能く
 小せりハ能き
 次へ



△おゆい
 横のあま
 と及び
 おゆい

○ 功健
 及
 大へ



△き 今日
 がある
 仕舞と断
 何れも
 子

○ 引込
 のを
 との
 先生
 の名
 との
 後物
 人々
 故二
 とある
 ○ 孫
 の光



お供の旗傳三
 うるははらうのうらうのうらう
 さうはらうのうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 おあけのうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう

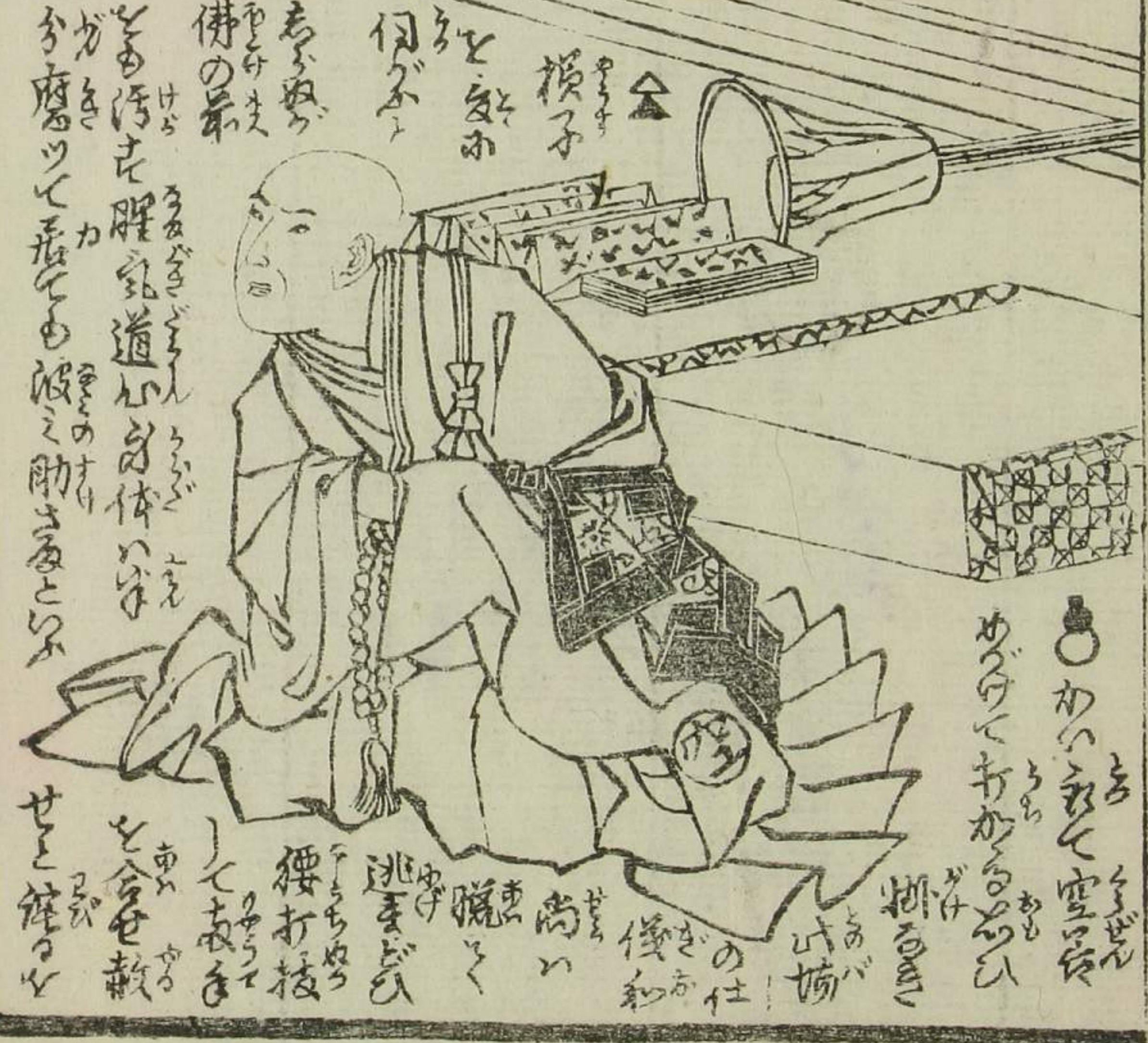
お供の旗傳三
 後ろのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 お寺のうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 お供のうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう



お供の旗傳三
 うるははらうのうらうのうらう
 さうはらうのうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 おあけのうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう

お供の旗傳三
 後ろのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 お寺のうらうのうらう
 さうのうらうのうらう
 お供のうらうのうらう
 あらうのうらうのうらう
 さうのうらうのうらう

〇かおのこころを水知のり
 まよふおぼえず我をひまふ
 袖のひさしをよもよもの
 袖のひさしをよもよもの
 おあひてとを夜れとも
 白菊の香
 菩薩の清浄
 して未来
 永く世を光輝の光
 おとも大車よの悲怖
 遠離一切煩悩。また
 兜丸。よく涅槃の



今くのとお徳かよと
 引く
 振とふあ
 鏡拵が机の上
 うすす
 ちやらく
 凡まの湯はま
 其の如く湯す月影由
 湯とて今ら顔のまを
 あり雨とまふんとまお
 阿弥陀の後ろよおあて
 借入かうてあらうとま



亭の女を捕へて不持
 不の世後おあろ
 軽んがま
 とへのねませぬ
 止むとをま
 お徳の雲
 既よ和尚を
 とまのトコイ
 信と後ろ
 うと抱止られ
 て波とぬ
 放せと
 急つと
 めオ、ま
 後い
 ちれ
 〇
 〇



何方不懐哉と云ふ西子に似たり
 何方不懐哉と云ふ西子に似たり
 何方不懐哉と云ふ西子に似たり
 何方不懐哉と云ふ西子に似たり

さやもあつたぬきさき
 さやもあつたぬきさき
 さやもあつたぬきさき
 さやもあつたぬきさき

何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細

何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細

何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細

何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細

何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細
 何れも何れも仔細

東京一區分繪圖全
 鹿兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全
 島田郎梅雨日記 五編
 大尾

珍寶々都々一
 身五扁
 板
 粉色入小本數品

御所櫻梅松録 十編
 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊
 新板双六類品々

龜
 地水問屋
 編者人 岡本勘造
 改草區及町十二番地
 東區人 綱島龜吉





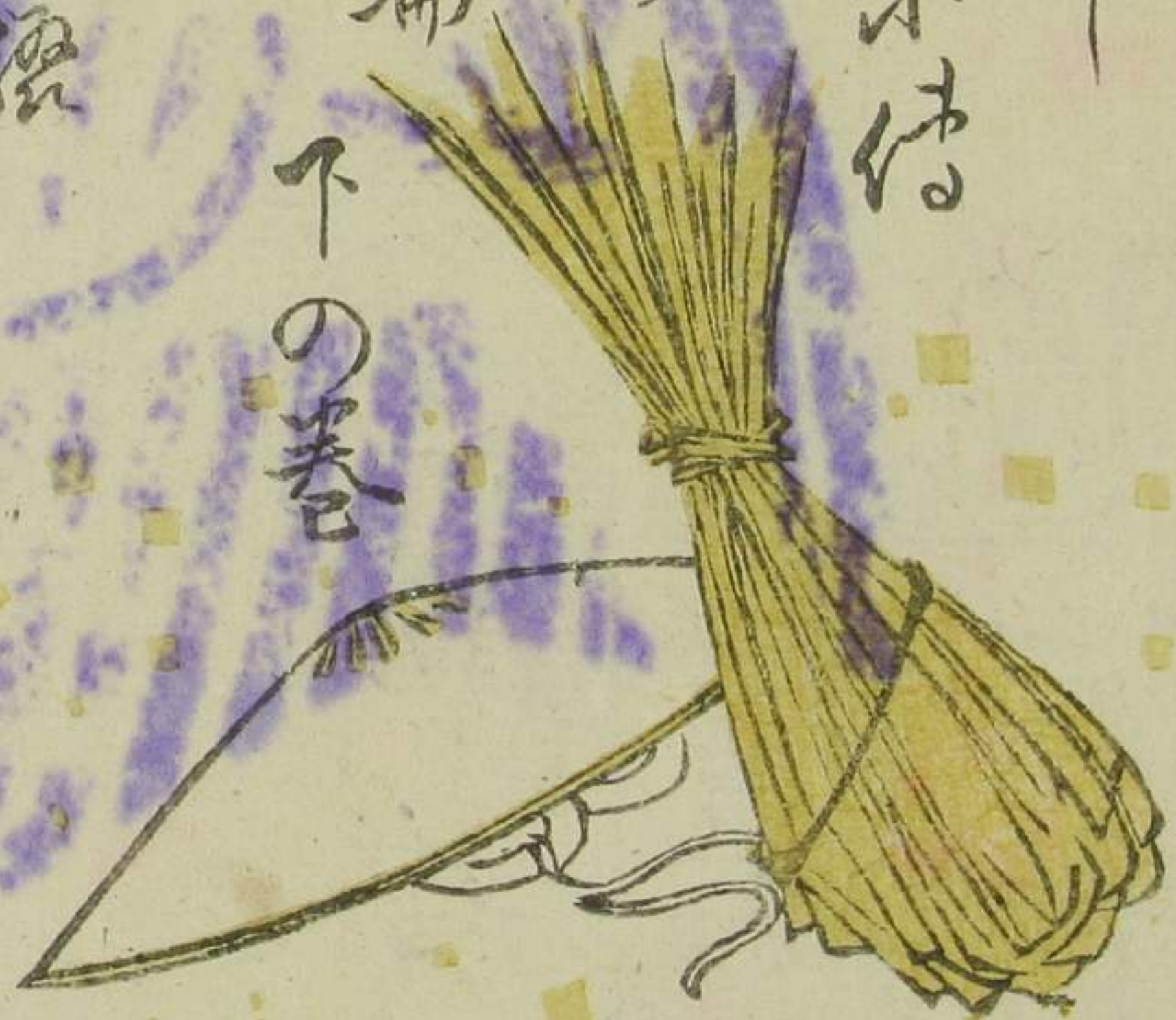
櫻齋房種画圖

三編下

2690
9



高き
長保の小侍
三篇
下巻
芳川信権関
長本勘定簿
権左の長経書



島田解文庫



治平元年の暮... 寺子由体... 一男も... 元徳... 寺... 世... 途... 妻... 子... 長... 権... 島田解文庫



一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、



一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 一百、





松が浪
人ぞうたの由

ついで由小等と云ふ
松が浪くまらぬを内小
東へ行て渡治まると
ちう家の宿とまらぬ
通う種て来ると時
雨の底とせせらに
い肩と打ひめおやく
松が浪の文蔵と云ふ
と切られあつと聞か
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ

松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ
松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ



松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ
松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ

松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ
松が浪の文蔵と云ふ
松が浪の傳志不
なり長ゆいぬ
いぬいぬ

要といひがきじて
 身と知るある知るの
 多るは移りしつらと世が
 笑ひし移りしを知らぬ
 移りし丁亥十六の耐水戸
 の天物とやうな軍を陸
 て攻て来るころ助るよ
 出村の者の一ふふは
 出家者の桑梅へ不義といひ
 あけて源川とやうに逃る
 志まの源田といふ人捕ま
 て既の首を切りし知を天
 物が夜付小来て撰つては



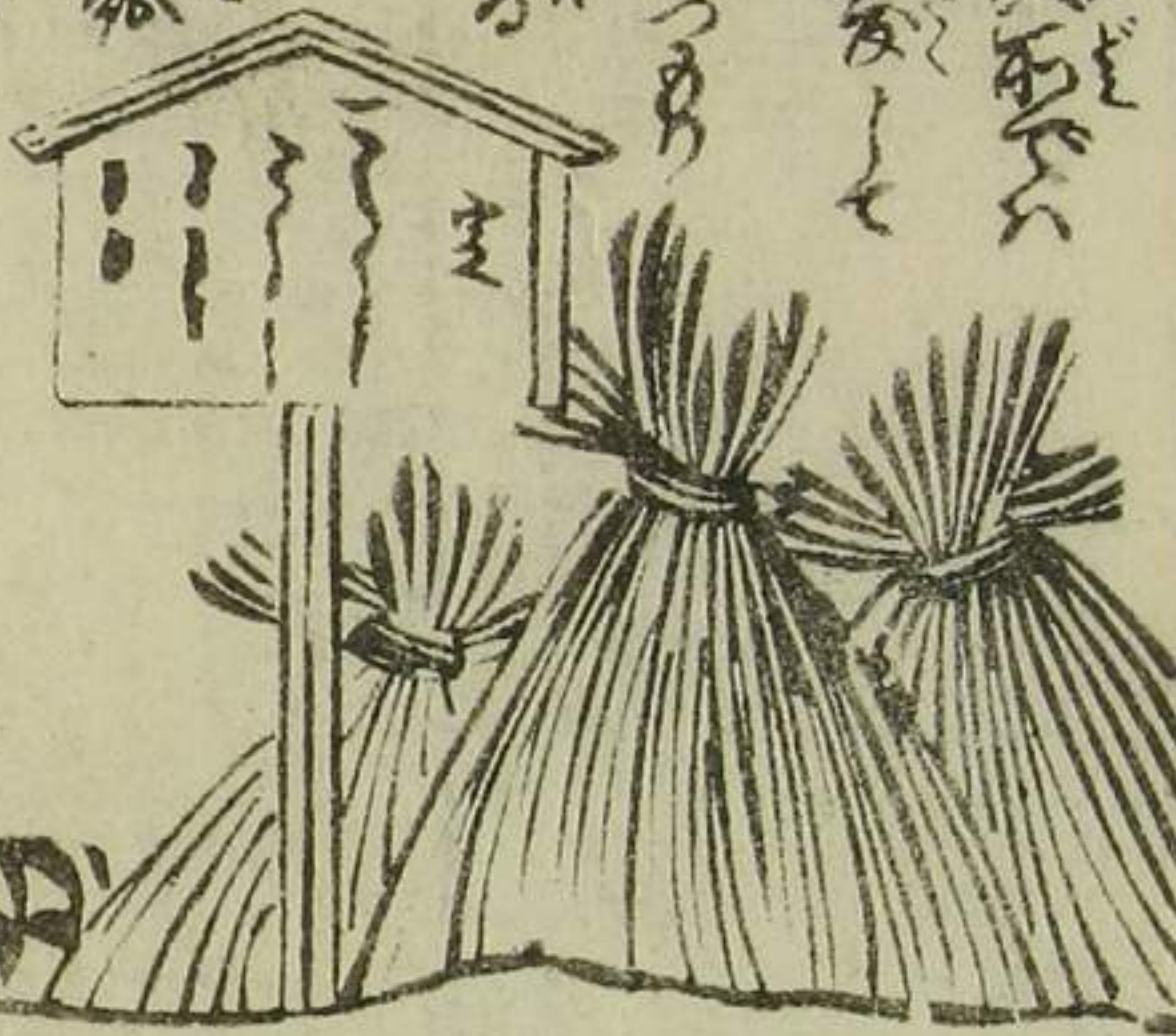
△口唇
 ねん
 けり
 みる
 みる
 みる
 みる



とありてありますとはゆへいどんめいこと
 実田の己様の秋まにわるといひあられ
 身まをわるといひ
 縁さしは
 今交悔む
 由たあられ
 どうかといひ
 後清まをさ兄
 の軍治と世を以帳とせ優てます
 されど故やと出て丸一奉使りも
 さまぬ逃亡のいふと今といふせん
 晴とおぼく故あやねい換とを
 めとんあうまうまゆも面おとせ

○うき天々の
 おで命と助る
 まう軍
 うまふ
 村へあち
 付のあも
 ふうい初番の傍ら
 大とあうけとの換るまを
 長程のいふの長由交法意の教か前と
 一ふふ系へはあうのあけとあ
 奴とあうのあう 志とあうとあう
 と例の通りあうとあうと

つぎ お侍の押のけり 矢張り
 あつちへん 見たり ありはあし
 明日は是れとも ありはあし
 一両ふりて ありはあし
 のま ありはあし
 ねが ありはあし
 一寸おしして ありはあし



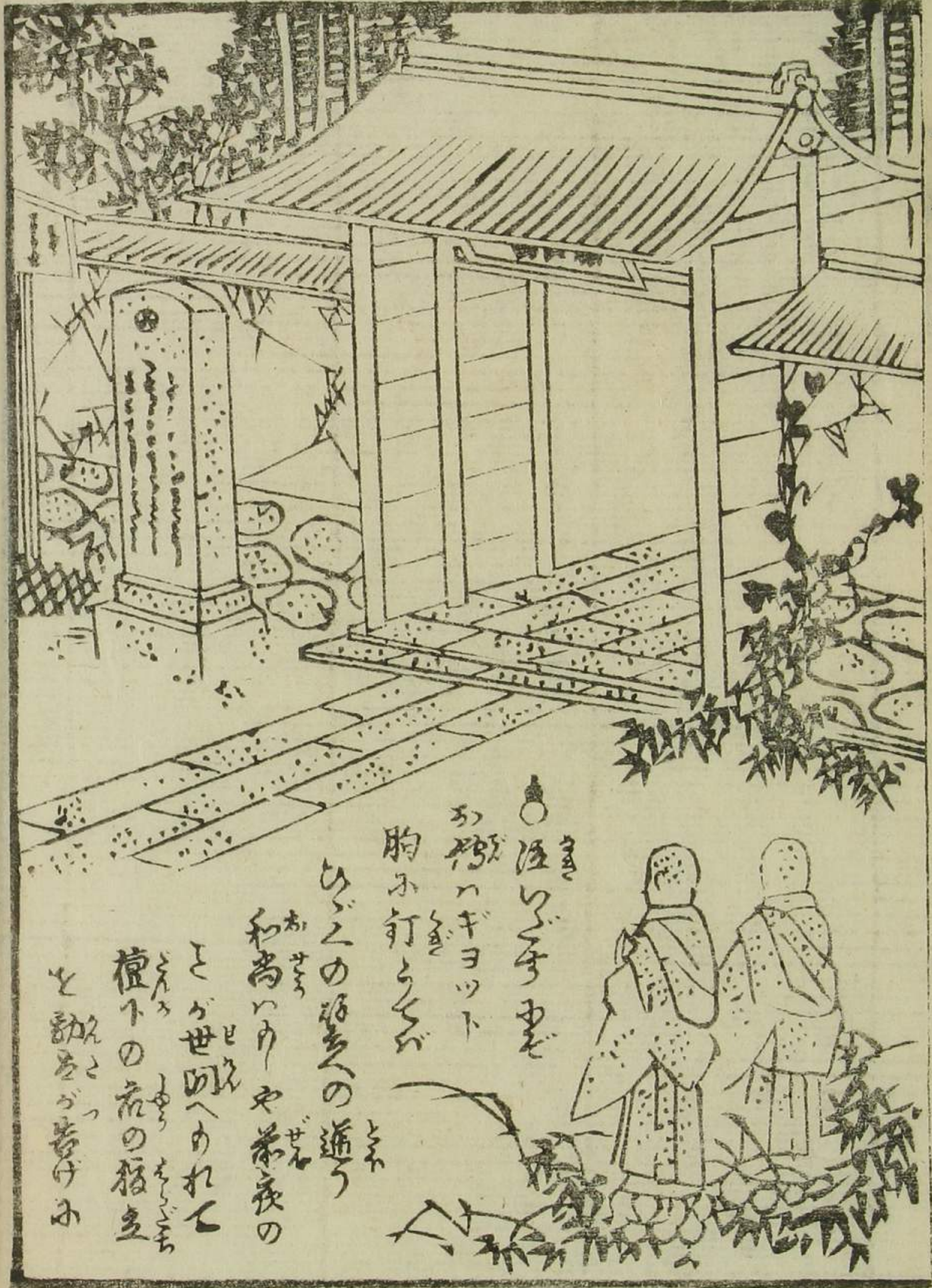
お侍の押のけり 矢張り
 あつちへん 見たり ありはあし
 明日は是れとも ありはあし
 一両ふりて ありはあし
 のま ありはあし
 ねが ありはあし
 一寸おしして ありはあし



さうさ 忍者の義族四五枚を
 小色は ありはあし
 波の助の名代を ありはあし
 宜長も ありはあし
 礼と ありはあし



お侍の押のけり 矢張り
 あつちへん 見たり ありはあし
 明日は是れとも ありはあし
 一両ふりて ありはあし
 のま ありはあし
 ねが ありはあし
 一寸おしして ありはあし



○ほりてすき
おだてギョウト
胸打とらふ
ひびきの道
わがせしや茶夜
檀下のるのぼる
と動かさず



くま
おぼろ
きこ
あそび
まわし
あそび
あそび

○大
だてとす
とを
ほりてす
おだも
わがせし
とひコレ
ほりてす
あそび
あそび
あそび
あそび

七
三
下

七

つぎ ひと今度おんがき

つと死骸と

☒ けさへ吊とむと

あきぬつらうと

先へ案内ふ来り

や〜アレ那へ

戸板

小糸て来せ

と傍を寄て

空日又も

ろくは場の仕後



☐ 海匠を殺せ

とせと

なる

共小

これ羽

名也

しま

はて

一ど物どうと

ハ藤中の残

あつう若

送音や

遺恨

と

よま

人

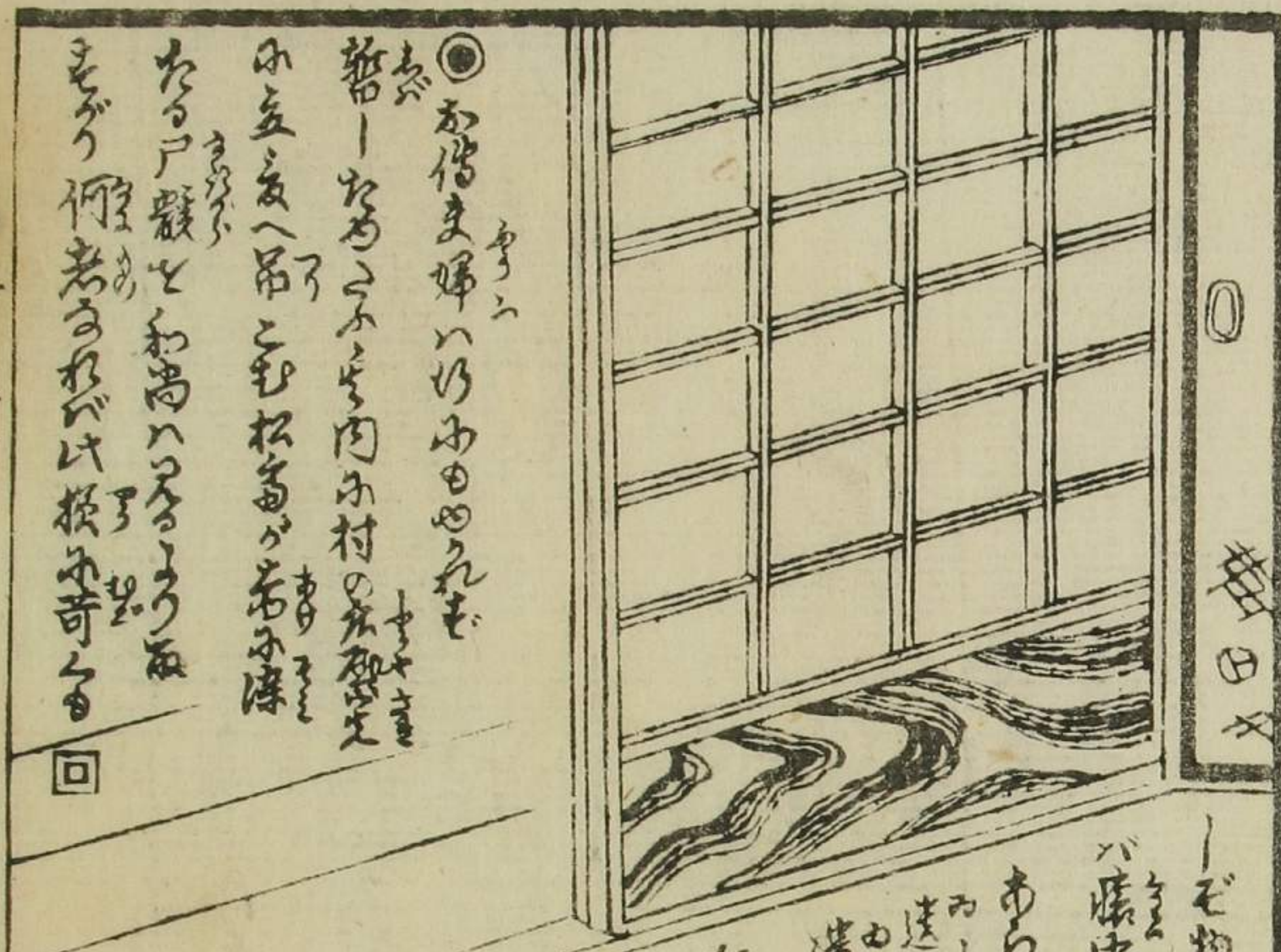
い

あのみ

と秋

例

珠



◎ お借ま輝ハゆゆゆ

誓一たあふと

小五へ吊とむ

たる尸骸と

まかう 何者



宿 武藏屋治兵衛

つぎ 旅人を抱へておれが

四向の歩向へおれが

折一共の歩向へおれが

あまふと帯のるるれと

取知し紙の包んで死體を

のせぬに阿弥陀仏のいのち

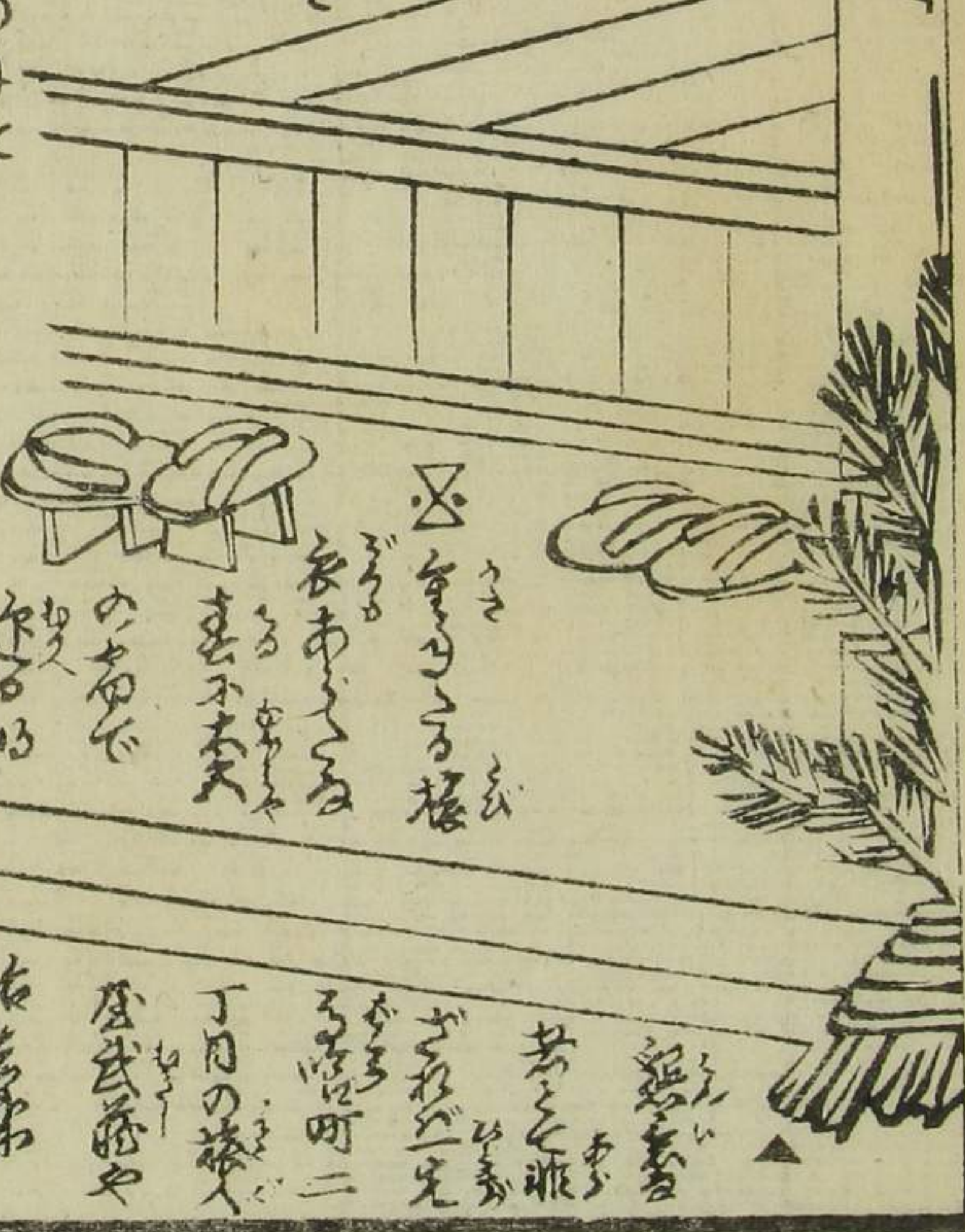
活合す人々へ接投して候し助のまを

推さるる月村とま出しが急がぬ旅人

路金も多々ある車田おまが病いのおま

不ふ来と加減あるうう中のはあふ

五日彼不ふ三日と還返し日と



△ 金より格

衣あふる

まふふ

のあふ

方へ書

御届明治十二年三月日
深川富岡町前番地
編輯人岡本勘造

芳川春海園
其名高橋
毒婦の伝
岡本起泉綴

東京奇聞

七編
よし切

御所樓梅松録

十五編
迄出抜

芳川春海園
岡本起泉綴

島田一郎梅雨日記

五編
よし切

命養生善惡鏡

一折本

芳川春海園
岡本起泉綴

白菅阿繁頼末

三編
よし切

單語圖解

一折本

太功記銘々傳

四冊

徳川年代鑑

一折本

龜地本問屋
錦繪

勤町區壱番町六土番地
編輯人 岡本勘造
殘草區瓦町十二番地
出版人 網島龜吉



名毛高橋

奇婦の小傳

東京奇聞

第三編

芳川俊雄閣

岡本勲造閣

櫻齋房種

島鮮堂種



~14
2690
7-9

